
地図にない楽園

刑部 科

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地図にない楽園

【Zコード】

Z5906M

【作者名】

刑部 科

【あらすじ】

前略。お母様。お元気ですか。

私は、魔界を侵略するのに飽きて異世界旅行に出た魔王様と、地球を観察に来た他星の宇宙人とクリスマスイブから一緒に暮らしています。

……だなんて年賀状に書いても夢オチと思われるのが関の山だろう。偽りの無い事実なのが。

私と地球外生命体の『彼ら』の話。

初日の出は、宇宙人と魔王様とコタツでみかんを食べながら見ました。

新年。

初日の出は異世界トリップしてきた魔王と、異星間トリップしてきた宇宙人と一緒に見ました。

「……なんて人様の前で口に出したら、頭がおかしいかつまらない冗談と思われて終わりだよね」

目の前の皿の上で焼きたての餅が程よく冷めるのを待ちながら、そう呟いたのは私 榊 芙音さかき ふおんである。

私だってこれが自分の身に起きたことでなく、人から聞いたことだつたら、間違いなく相手の正気を疑うだろう。そして、場合によつては病院で検査することをお勧めする。けれど、残念ながら当事者は私で、しかもどうやら病院にいっても解決しそうにない。紛れもない現実なのだった。過労による幻覚、あたりだつたらよかつたのに・・・・・。

私はため息をついて床の一角に視線を投げた。年賀状が一枚落ちている。

宛名は母のものだ。

昨夜、書くだけ書いたものの、投函をあきらめて放り出し、そして数時間経つた今も床に放り出されたままになつている。私は年賀状にこう書いていた。

『 前略。お母様。お元気ですか。私は毎日釘バッジで素振り50回位なら余裕で出来そうなほど元気です。

(もしかするとその間手が滑つてナニかにぶつけてしまうかもしねませんが、犯罪者にはならぬよう気をつけますね)

そうそう、新年あけましておめでとうございます。今年もよろし

くお願ひします。

さて、私のほづの近況といつと、クリスマスイブから一人の同居人と暮らし始めました。

同棲ではありませんので、お赤飯を炊くのは辞めてください。同居人は、魔界を侵略するのに飽きて異世界旅行に出た魔王様と、地球を観察に来た他星の宇宙人といつけつたいな組み合わせですが、今のところ世界の平和は脅かされることはなさそうです。

ご安心下さい。

それでは、お母様も、お体にお気をつけて。

釣った魚ならぬ、お父様にもたまには餌をあげてください。可愛い娘からのお願いです。

そのうち実家にも又、顔を出しますね。では。』

ここまで書いた。後は投函するだけだ。なのにその手がとまつたのは、内容の余りの怪しさに我が事ながら目がうつろになったからだ。

さすがに、これはない。私のお茶目が発揮したちょっとバイオレンスな一言が無くとも、この上なく怪しい。

うな垂れながら餅を一口食む。　ああ、ぱりっとした海苔と餅とのコンビネーションはなぜこんなにうまいのだろう。

「でも、実際事実ですしね」

すっかり慣れた手つきで、自分の餅に海苔を巻きながらそう言つたのは、宇宙人ヤマシイ＝タタ＝ロウだ。

こやつ、宇宙人の癖に名前の音だけ聞いたら日本人みたいである。実際、外に出る時は山下太郎と名乗つているらしい。

しかし、どう見ても彼は銀髪碧眼の非黄色人種な外見をしているので全然似合つていない。がつかりだ、太郎の癖に。

さらに、きらきら仕様の見た目一見氷の王子様のようなので、がつかり感倍増な感なのは否めない。

銀髪美形の王子さまなのに太郎。

昔、山田太郎と言つ名の美少年の出でくる漫画があつた気がするが、あれはあくまでフィクションだからよかつたのだと思つ。

それに、一応あの漫画の彼は黄色人種のようだつた。

この宇宙人は、同じタロウでも赤と銀が煌く特撮ウルトラ超人並みに違和感がぬぐえない。

そういうえば、あれも宇宙人だつたような？

なんだ、既に前例がひとつあつた。方や現実、方や創作といえど前例は前例だ。それを思うとそこまで変、でもないのだろうか。

いやいや、でも。

自分の感覚が非日常に慣らされて日に日におかしくなつていくような気がした。

「初日の出を見てこたつでみかんを食べる魔王がいたつていいと思うが」

魔王ターナ＝カーサ＝トウス＝ズッキイはみかんを剥きながらそう言つた。その手は既に熟練の手つき、すじ取りまで完璧だつた。この魔王、名前が非常に中途半端でもどかしい。田中か佐藤か鈴木かはつきりして頂きたいと何度も思つたことか。

まるで売れない芸人の名前のようにだ。

こちらは黒髪だがやはり碧眼。ヤマシイと同じく恐ろしく顔の作りはいい。思わず殴りかかりたくなるほどだ。 異論は認める。変形しても美形なのかどうか、少し気になるのだが、暴力は良くないという認識は髪の毛の細さ程度には存在している。ゆえに、まだ変形するほど殴つたことはない。

私は平和主義者なのだ。

・・・・・せいぜい、ちょっとお仕置きに軽く拳を振るう程度。

顔面を変形させるほど強い暴力なんてとんでもない。

いざれにせよ、田中や佐藤、鈴木というイメージではないと思うの

は偏見だろうか。

「余り無いケースだから、信憑性が疑われてしまうんでしょう」

余り無いどころか、普通は一生縁がないと思うんですが？

私の心のツツ「ミミは感じとつて頂けなかつたようで、ヤマシイのその言葉にターナはそうか、とうなづいていた。

「確かにわたしが旅行に出たのは久方ぶりだ。3000万年くらい前だつたか」

「あ、そんなものですか。僕なんかは寧ろ家にいることよりも船に乗つてていることのほうが多いくらいですから、ちょうど反対ですね」「船の外はずつと星の海なのだろう？ 飽きないか、その生活」

「寝ていることも多いですしね。起きてる時はネットワークからダウンロードしてきた娛樂映像見たりとか。ネットワークに流出してきた他星系の動画も見ますよ。その星によって面白いと思うものが違つたりするから、楽しめない時もありますが。そこを言うと、フオノの住んでいるこの地域で作られる娛樂映像は人気がありますよ。アニメですとか、ニーコニコですとか、ユーチュブですとか。とりわけアニメがいいですね。アニメが」

「アニメにニーコニコ動画にyou tubeかよ！ ・・・・」

いやだ、こんな宇宙人！」

私は額に手を当てて首を振つた。

残念すぎる。しかも、折角美形なのにアニオタとか。

私自身もオタク氣質にそれなりに溢れてはいるので人様を非難する資格はないのだが、それにしたつて美形男子にちょっとくらい夢見たいのが乙女つてものだ。まあ、美少女フィギュアがほしいと言ひ出さないだけましと判断しておくべきか。

「他星系にすら誇れる文化ですよ？ 大人気なんですから、あのコンテンツ」

「ああ、確かにあれは面白いな。初めてこの世界に来た時にあれを見つけてよかつた。そうじやなければ、危うく侵略するところだつた」

しみじみと魔王様は物騒なことを仰った。

アニメ一つで世界が救われたなんて！

なんだか悲しくなる。

いや、喜ぶべきなのだろうが。アニメで世界が救われたというのなら。

「そうですか。 そうならないで良かつたです。 あれはいいものですし。 そうそう、気が変わってこの世界を侵略したくなつても、せめて僕が死んでからにして下さいね」

「お前の寿命はどれくらいだつたか？」

「ええと、今ある冷凍睡眠と延命技術をあわせても精精数百年つて所ですから。 一千年後くらいなら大丈夫じゃないですか？ フオンもその頃には余裕で墓の下でしようし。 確か、この星の人間の寿命は百年そこそこのでしたよね、フオン？」

「そんなんに短いものなのか。 地球の人間とやらはショボいな よしよし、と可哀想なものを見る目で頭を撫でられた。 手つきが優しいだけに腹立たしい。

「ショボいって言つたな！」

私はぱしつと魔王ターナの手を振り払う。

ああ、今日も世界は平和だつた。

魔界を侵略するのに飽きて異世界旅行に出た魔王様と、地球を観察に来た他星の宇宙人と。

去年のクリスマスイブに出会つてから、今日で丁度一週間目。 何故か私の家に転がり込んだ彼らはこのまま暫く居つく勢いで。 ご近所さんに見られたらどう言い訳しようか。

それを考えると、新年早々なのにちょっとびり鬱になつそつである。

「フオン？ お腹がすいて不機嫌なんですか？ ちょうど追加で焼

いたお餅も、もてる程度に冷めたようですよ。召し上がる

「ああ、そうだったのか。悪かった。遠慮なく食え。砂糖醤油もあるぞ」

「きな粉も用意しておきましたから。足りなければもつとお餅も焼きましょ」

それでも彼らとの暮らしは不快ではなく。

「よし、食べる！・・・大根おろしも用意してくれる？」
「じゃあ、すつてきますね」

立ち上がる宇宙人ヤマシイの背中を、私は餅に食いつきながら見送った。

* * *

今年は次の瞬間ナニが起きてもおかしくない一年だ。
何せ、宇宙人と魔王が自分の家で暮らしているのだ。
同じ状況になった人間は、おそらくどこを探しても一人も居ないだろう。

そうそうあつても困る。

私が地球人類として、初めて遭遇したケースなのだ。

この先ですら、同じ状況になる人間が一度と出ない可能性がある。
「そう考えると、私って不幸なのか幸運なのかどっちなのかなあ」
何十億、何千億分の1の確立か、とてもレアなケースに立ち会えたのだから。

首を傾げる私に、ヤマシイが素つ頓狂な言葉を返してきた。

「え、復興と耕運機？ フォンは村おこしでも始めるんですか？」
「誰もそんなこと言ってないわ！」

私はヤマシイの高いところにある頭をペシリと叩いた。

「フォンは激しいですねえ。姫初めがＳＭというのは余り僕の趣味ではないんですが」

などとバカなことをいう宇宙人との出会いはあんまり幸運そうじゃないが、不幸でもなさそうだ。

「そうだな。わたしもどちらかといとなかせるほつが得意だし「・・・・・・こんな魔王に出会ったことは、もしかすると少し不幸かもしない。

ただ、二人とも美形といひことで田の保養はできるからプライム。

除夜の鐘で一人の煩惱を振り払つてやつていればプラスまでつていけたかもしないのに、惜しいことをしたものだ。

「バカなことを言つてる暇があつたら、魔界と自分の星に帰れ！」

バカなことじやなくて半分本気なんですが、というヤマシイの咳きと、半分どころか私は8割くらいは本気で言つているのだがとうターナの咳きの両方を私は黙殺した。

「・・・・・そういえば、後で初詣でも行く？」

まだ不満そうに咳いている一人をスルーし続けた上で、私は提案した。

「別にいいですけど。人多そりでですね」

「何を着ていけばいいか迷うな。下手なものを着るとフォンが怒る「あんな派手なマントを着て街中を闊歩したらなんのコスプレかと目を疑うわ！」

「フォンはファッショニに拘りがあるのでな。よし、後で監督してくれるか。初詣に行くこと自体は吝かでない」

「わかつたわ・・・・・・じや、後でみんなで一緒に行こうね「平和で楽しい一年を過ごせるよう、祈りに」

加えて、私の貞操の無事も。

新年開けて一一日目といえば書初めだ。

宇宙人と魔王という地球外生命体の二人に日本の文化を体験してもらおうと、半紙と墨と硯と筆を用意した。

慣れない「人が墨を飛ばす可能性は高い。

被害を抑えるべく、新聞紙を床と机の上に引き出したはいいのだが。

「ターナ！ 新聞紙、そつち広げてくれる？」

「新聞はこれでいいのか？」

「そちらはまだ新しいものですから、こちらを使つた方がいいかも

しませんよ」

「ありがたい。ヤマシイ、それをこちらに渡してくれ

「あ、これも使えそうですよ」

「両方共くれるか？」

「いいですよ、どうぞ」

「あ、ちょっと！ ターナ、踏んでる！ 私の本！」

「ああ、すまなかつた」

「すいません、フオン。僕も踏んでいたようです。……角は折れてないようですが」

「気を付けてよ、二人ともー！」

でかい男二人と女一人（私のことだ）が動くには、2DKの部屋でも狭かつた。

女ひとり暮らしとしては十分な広さ。

これで、家賃はとあるツテを利用できた為に破格の値段と、人が聞いたら絞め殺されてもおかしくないほど恵まれた部屋なのに。

書初を始めるのすら一苦労だった。

* * *

「……こんなものかしら?」

漸く床と机の上を新聞で埋めることに成功する。
新聞紙を引くだけで數十分かかってしまった。お正月は有限なのに、時間がもつたいたいなあ、と思う。

これを後で片付けるのも正直面倒くさいのだが、始めてしまったからには仕方ない。

「じゃ、次。墨をすつて」

私の指示に、ターナとヤマシイは揃つて首をかしげた。

「墨をすることは?」

「どうすればいいんですか?」

渡した墨を一人はしげしげと見つめた。

「……この紙にこすりつけばいいんじゃないのか?」

「大分粉っぽくなりそうですけど。いいんでしょうか?」

「粉が飛んでもいいように、新聞紙を引いたのではないか?」

知能レベルはかなり高く、学習能力も高い一人だが、地球上における知識は大分偏っており揃つて変な所でぬけている。

「硯を用意したでしよう」

それを承知で全部を教えない私も私なのだが、二人がどういう発想をするのか少し興味があつた。

硯を指示し、ヒントだけ与えてみた。

「硯、とはこの窪みのある石のようなものか」

「この中にこすり付ければいいんでしょうか。でも、そうするとこの紙はどう使え……」

「この窪みに粉を溜めて、筆で紙にこすり付ければいいんじゃないのか? 書初には筆も使うようだから」

「なるほど。しかし、この筆に粉が絡みますかね」

「……水でもいれればいいのか？」

「どうなんだ？ とほぼ完璧に近い答えをあげたターナ達に、

「だいたい合ってるわ」と私は頭を縦に振った。

うーん、これくらいなら聞かなくて想像できるか。

教えてくださいの言葉を密かに期待していた私としては残念である。

「水と一緒にその硯ですればいいのよ」

「出来上がった黒い水で、この紙に何かかけばいいのだな？ 何か書く行事なのだろう？」

「何を書きましょうか」

「新年の抱負とかなんだけど…… そういえば、二人は文字は書けるの？」

「日本の文字は読めるようだが、書けるかどうかは聞いていなかった。

「僕の星の文字なら、書けますけど。共通語以外でも、30ヶ国語くらいなら」

「わたしも、魔界の文字なら書けるのだが…… そういえば、あれを人間が見ても大丈夫なのか？」

「……え、何。ヤバそうなことは御免よ！」

「……大丈夫だ、と言いたいが正直自信がないな。…… 魔界で使われる文字は、呪力を孕んだものだから」

「ジュリヨクって何？」

「……お前たちの世界の娯楽書でも、魔法という概念は出てきたかと思うが、それと似たようなものだ」

「端的に言つと？」

ターナは一瞬目を伏せ、すぐに顔を上げるとにやりと笑った。

「何か、起こる」

「何かつて」

「さて、なあ。この世界にきてから、呪符はそういう書いたことがなかつたから、魔界と同じ効果が現れるのかどうか、威力はどの

程度なのかわからん」

「試してみます?『現在のポイント』を僕の持つている機械に保存しておけば、失敗しても少なくともその地点まで復元することができますから」

何、そのWINDOWSのシステムの復元みたいな機能は・・・。呆けて口を開ける私の目の前で一人はどんどん話を進めようとした。

「ふむ、やつてみるか」

乗る姿勢を見せた魔王ターナを見て、私は一人を止めた。

「やめてちょうどいい!」

何が起こるかわからぬのに、そんなことさせられるか。答えは否だ。

「やるなら外にして! 万一、その復元とやらも失敗したらどうするのー!」

「それもそうか。・・・それとも、その復元とやらは100%成功するものなのか?」

「98%って所ですね。ほとんど成功しますが、不測の事態も無いとは言い切れませんし・・・そもそも、魔王の呪力というものを体験した事が無いので。未知の要素が入ることになりますから」

「やつぱり止めてくれるかしら?」

「そうだな、止めておこう。そうするとわたしは何を書けばいいのか迷うな」

私とて、何を書かせれば安全なのか迷う。

まさか、こんな罠があるとは思わなかつた。

「僕も迷います。何語で書けばいいのか。・・・そもそも、フォンに読めない物を書いてもつまらないでしちゃうしね」

それもそうだった。

ヤマシイの書く宇宙人の言葉。

間違いなく私には読めそうにない。

「.....絵でも書くか?」

「それほいいですね。絵ならフォンもわかるでじゅう?」

「……そうして」

「なんとかまともったよつで、私はまつとしたよつたため息をついた。

安堵の吐息は、すぐ様、怒声に取つて代わるのだが。

書初でまさかこんな如何わしい芸術が生まれるなんて予想だにしなかった。

「ちょっと、ヤマシイ……何これー！ものすごい上手いのはいいけど、なんで私が素っ裸の絵なの！」

お子様にはちょっと見せられない、18禁仕様。所謂、春画というのじゃないだろうか、これは。

絵心を十二分に感じさせられるそれは物凄く上手い上、細部まで丁寧に書き込んである。

なんで筆でこんな絵が描けるのか。

「ああああああ！！！ターナも、なんてもの描いてるの……」

ターナのほうも似たようなものだ。こちらは絵というよりは台詞の無い漫画。勿論成人指定がつくのは間違いない。

ヒロインは勿論、私である（デフォルメしてあるが、私にソックリだ）

「だいたい、なんであんた達、私のおへその横にある痣を知ってるのよーーーーー！」

二人の前で脱いだことは無いはずなのに、一人揃つて私を思わせる女性の腹には逆三角形の形をした痣がある。その形の痣は勿論、私にもあるのだ。

一枚ともすぐに燃やしてやった。

あっけなく、灰になる。

書初めは古来、燃やして文字の上達を願うものだったと言つから、それは正しい作法だ。

そういうのに、残念そうに眉を垂れてため息をつく一人の急所

には、膝蹴りを仲良く食らわしてやつた。

あんな危ないもの燃やさずにいられるか、なんて本音は口にしない。

い。

書初め後の片付けはすべて一人にやらせた。
罰ゲームにすらならない程度で勘弁してやるなんて、私はなんて優しいのだろう。

力加減はちゃんととしている。

「もし、今夜以降、襲つてきたら本氣で潰すからね？」

「どこを、と言わなくとも伝わったようだ。一人は勢い良くなづいた。大変結構！」

笑顔の私を見て、宇宙人と魔王の二人が顔色を真つ青にしたのは流石に大げさな反応だとは思うのだが。

あんた達、人類にとつての脅威の存在じゃないのか。

そういうえば、地球外生命体の一人にも日本の法律は適用されるのだろうか？

ふと思いついて尋ねてみる。

「ねえ、あんた達殺つちゃつたら犯罪者になるのかしら、私」

「え、やる気満々ですか！ どうせなら、やらしい方のやるにしておきませんか。それなら僕は拒みませんし」

「……それを答えた時の反応が怖いから、わたしは黙秘しよう。しかし、ヤマシイの提案の方ならわたしも乗……」

「……皆まで言わせせずみぞおちに肘打ちを入れてやつた。

よし、悪は滅ぼした。そうだよね、魔王っていうくらいだし、人間が滅ぼしても犯罪にはならないよね！」

宇宙人はどうなんだろう？

宇宙人ヤマシイの顔をじーっと見つめていると、

「僕、用事を思い出しました。買出し行つてきまゆ
逃げやがつたので追求はとりあえず諦めた。代わりに、買出し便
乗注文する。

「じゃあ、期間限定のさるぼぼチップスよろしくねー。
夏まで限定の商品だが。
「わかりました、行つてきますー！」
安請け合いと思いまや。

帰つてきた時、本当に彼の手に夏限定のはさずのさるぼぼチップス
があつたので、こいつは生かしておく価値があると思い直して、滅
ぼすのはかんべんしてやつた。

尚、不死身を喰う魔王様がなぜかまだ悶絶して床を這つているの
だが、これはどうしたことだろつか。

4・三が日終了【前編】

「お正月らしい遊びをしよう。」

家の中でこもりきりだから、妙な煩惱など生まれるのだ。
そうだ。そうに違いない。

エネルギーが余ってるから、そんな所に思考が飛んでしまうのだ。
これではいけない。

乙女の危機を感じた私は、一人に別の楽しみを教えることにした。
お正月といえば、やっぱり！

必要な小道具の買出しに来たホームセンター内。

家から徒歩12分という微妙な距離にあるホームセンターは、まだお正月明けて三日目ということもあり、初売りセール当時の客でそれなりに「」つた返している。

人ごみではぐれてしまうことを懸念したが、長身の二人は人よりも頭ひとつ近く抜きんでいるせいで見失うことはなさそうだった。
長身というだけで人目を惹く。

それだけなら、良かつた。

「で、何を買えばいいんでしょう？」

「コンビニよりも大きいな」

きょろきょろとフロアを見渡しながら歩く二人は異常に田立つていた。

身長が高い二人が並んでいるから田立つというのもあつたが、それ以上に目立つ理由があつたのだ。
しまつた、と私は臍を噛む。

うつかり忘れていたが、この二人美形なのである。

しかも、どう見ても日本人には見えない。

お正月でひきこもり気味、顔をあわせるのはたまに買出しに行くコンビニの店員のおにーちゃん（またはお姉さん）の他はこの一人だけだったので、感覚がすっかり麻痺していた。

信じがたいことだが、世間一般の基準に照らし合わせてみたらこの二人、極上の美形と言つやつだつた。
せめてひとりだけならまだしも、二人。
中身がアニメオタの魔王と宇宙人だと他の人には知りようがない。

他人にとつては良い観賞用のオトコ二人。

視線がイタイ。側にいる私にまで視線が飛んでくる。
そりやそうだ、この二人と私では見た目のスペックが違すぎる。
どういう関係か気になつても仕方ないだろう。

「フオン、どうしたんだ？ 何か買いに来たのだろう？」

「お正月用品のコーナーありましたよ、あちらじゃないですか？」
一人から少し距離をとろうとしたら、見つかってしまった。

「フオン！？」

呼ばないで、お願い！ という私が飛ばした念というか電波を、この宇宙人は受信してくれなかつたらしい。
使えない宇宙人だ。

「そつちじやないですよ、こちらです」

笑顔で私の腕を引いて、目的のコーナーまで案内してくれた。
ああ、周りの皆さんの視線が痛い。

「玩具を探すんですね」

「大人のおもちゃ、というと卑猥でいいな」
それなのに空氣を読まないこの魔王の発言。

「黙れ」

手にした羽子板で一人を殴りたい衝動に駆られたが、POSを通す前だつたので自重した。

くつ、命拾いをしたな、二人とも！

「羽と羽子板、コマと紐、めんこ、あと歌留多。花札も買つか。麻雀なら家にあるけど3人じゃねえ」

サンマしかできない麻雀なんて麻雀ではない。

一人、ないし3人で遊べるお正月の遊びといえばこれくらいだろう。

「あ、花札知つてます。負けたら一枚づつ脱いで行くんですね！…ぱつと顔を輝かせて、宇宙人が偏つた知識を披露した。

「何そのエロゲ展開！」

「C.P.Uが強くて、結局勝てないんですね……」

「お前もか。わたしも何度もやつてみたのだが、最後の1枚は絶対脱がないんだ…」

「そりなんですよね、何度も挑戦して見ましたが、やりすぎてフオンのマウスが壊れてしまいました。あ、マウスってここでも売つてますか？トラックポイントだとしんどくて」

……新年明けそろそろ、マウスの調子がおかしいと思つたら貴様らのせいか。

確かに私のパソコンは自由に使っていいといったが、エロゲをインストールしてもいいといった覚えはない。

「どうも、彼らの学習能力は妙な方向に發揮されていたらしく、うかつだった。

「…………花札、ルールを教えなきゃいけないかと思つたけど、その必要はなさそうね」

教えるとなると大変だなと思っていたのだが、私の知らぬ間に學習していたようだし？ ハロゲーで。

なんという破廉恥な二人だろう。おまえたちが絶世の美形だなんて、世の皆さんに謝れ！

「あ、一通りなら調べましたから大丈夫です。」
「…………でもおいちよかぶでも花あわせでも」

「わたしも大丈夫だ。それじゃ花札からやるか？」

「ええ、そうしましよう。勿論、罰ゲームつきですよね、フオン？」

「…………」

「…………笑っているのよ」

ふふふふふ。

「私を本気にさせるのがお上手だこと。

悪いが花札には自信がある。

自慢じゃないが100戦やつたら99勝ぐらい朝飯前だ。

カードの引きが異常に良いのだ。

その為、知つている身内は花札で私に勝負を挑もうなんて考えないくらいである。

「罰ゲームつきで、やりましょ？」

私はふんわりと微笑んだ。

日付はすでに変わっている。

「フオン、これ何時までやればいいんですかっ！！！」

「そろそろ疲れてきたんだが、まだか！？」

「まだ！！」

私は一人ベットで寛ぎながら、読書中。

男ふたりは下着一枚で逆立ち中。

下着一枚なので危険なゾーンが見えそうだが、そこは視線を逸らすことでの対応。

男友達が少なくないせいで、下着くらいなら見慣れている。

「一晩ずっとそうしてなさい」

多分、死にはしないだろう。

「寒いです、フオン」

「暖房の温度をあげてくれ」

「ダメ」

「……頭に血が登つてきました」

「くらくらするな」

二人の顔は大分赤黒くなつてきている。

そりや、数時間そんなことをしていればそつなつてもおかしくはない。

一応、確認はしたのだ。魔王のHPと宇宙人のHPについても。
どのくらいで死ぬのかどうか。

一応、地球の法律に照らし合わせれば犯罪ではないかもしけない
なあ、とは思つていてるが何かあつたらやつぱり氣まずい。

限界は一応把握しておくべきだと思い、うまいこと聞き出してお
いた。

彼らの回答だが、魔王曰く勇者の必殺技でも無い限り死にはしない
いそうだし、宇宙人に対して蘇生回復技術はめざましいらしく、そ
う簡単には死なないとのことだった。

だから気にしない。大丈夫、大丈夫。

「明日は、羽子板しましょうね！」

明日といふかもう今日か。

日付変更は過ぎてゐるのだから。

なんだかあつといふ間の三日間だった。

「明日、明日ですか……」

若干虚ろになつた目でヤマシイが呟いた。

なんだ、明日というのが不満とでも？

確かに、お正月といえば3田間のことを大体さすものだが、一日
くらいオーバーしたところで構いはしないだろう。たゞさうして
せつかく買ったんだし。コマも歌留多もあるのだから、遊ばなく
ては損だ。

明日こそお正月らしい遊びを堪能しよう。

羽子板だけでなく、書初めの時に使つた墨も筆もある。羽根つき
と言えば、罰ゲームで顔に落書きが基本だ。
由緒正しい罰ゲームの行使が楽しみだった。

勿論写真撮影のオプション付きで。

「明日。……一晩逆立ちし続けた後に羽根付きとやらができるのだ
らうか。フオンはどうだな。しかしたまにまはこうこうプレイも悪く
はな」

魔王の世迷言を全て言わせる前に、気づいたら右手が動いて
いた。

ああ、私の本！

「酷い、一撃で伸びてます……ああ、あんな所に当てるなんて！
まあ、下着一枚で逆立ちしていたら、当たりやすい位置にあんな
ものがあつたわけで。

私は、悪くない。

「何か不満でも？」

「い、イエ……」

小刻みに震えながら逆立ちを続けるといつ器用なことをしてゐる宇
宙人ヤマシイは、さつと私から視線をそらした。

6・一夜明けて

黒っぽい塊が足元に一つ、じりりと転がっていた。

「根性なしどもめ……！」この程度か！」

高らかに笑う私に、眼下の塊がぴくりと反応した。

「フオンが強すぎるんですよ……！」

「ハンデを付けて貰えればよかつた！ 勝負事になると、なぜそんなに強いのだ」

一つの塊はそれぞれ宇宙人のヤマシイと魔王様ターナだ。

耳なし芳一もかくやどばかり、全身余す所なく墨が這つている為、まるで黒い塊のよう位見えるが、間違いなく元は美々しいイキモノだった。

『元』は。

現在は黒っぽくて小汚い為、素を想像するのが残念ながら難しい。一面黒一色ではなく、所々元の地の色がのぞいている為、余計に無残な有様である。

よくよく見ると、ただ塗りたくりでいるのではなく、それは「痴漢」という文字であつたり「変態」という文字であつたり、「色魔」という文字が書かれているのだとわかる。

人間やればできるものである。筆の限界に挑んでみた。新世界を見つけてしまった気持ちである。

隙間という隙間に書き込んである為、遠目から見ればおそれく全身真つ黒な塊に見えるのではないだろうか。

彼らは、『お正月だよ、全員集合！ フオンさんと羽根付き大会』という企画（勿論主催は榎茉音、つまりは私である）に参加し、敗北した者達である。

羽根付き大会といえば、負けたら墨で落書きがつきもの。書初で使つた墨を全身全靈ですり倒し、迎え撃つ準備は万端だつた。

背後から、

『フオンが、なんだか怖い……』といつ発言が聞こえてきた気がするが、きっと空耳に違いないと無視させていただいた。

「さて、ござ尋常に勝負！」

と簡単にルールを説明した後二人と羽根付きをした。

しかし 、味も素つ氣も無く、勝敗がついてしまつたのだ。
あつけなさすぎる。

流石にはじめの一回二回は慣れないとあるし、罰ゲームは免除していた。

暫く慣れるまでは手心も必要だと思ったのだ。

それも3回を超えたあたりから、彼ら自身が罰ゲーム免除は不要と言い出した為、罰ゲームもつけることにした。

日の周りに。×。ちょび鬚。猫ヒゲ。皺。怒りマーク。
羽根突きの罰ゲームといえばまさにこれだろ。

思うまに筆を振るうことにする。

芸術は爆発だ、と言つたのはかの有名な芸術家だが、これも芸術のうちに数えてよいのだろうか？

そうして、初めの頃は、オーソドックスな模様を書いていたのだが、やがてネタが尽きた。
彼らが弱すぎるのだ。

全戦全勝する私と、全敗の彼ら。

ネタはついても不思議はなかつたが、勝負はまだ続いていたので、途中から彼らにふさわしい称号を思うまに書き連ねることにした。

変態や色魔などがそれだ。

あまりにもふさわしい称号で彼らも悦んでいることだろうと思つ。もう、書くスペースがそろそろ見つからないなあを思つてきたところで、ほぼ黒い塊になりつつあつた男一人が力尽きたように崩れ落ちた。

「なんだ、だらしのない・・・・・・」

確かに、私は罰ゲームや報奨のかかつた勝負事となると何故か燃える質で、常以上の力を出せるし、疲れ知らず（ただし後でその反動が来る）ではあるが。

仮にも彼らは魔王と宇宙人。紛うことなき地球外生命体である。すなわち、地球人の枠の外にいる存在のはず。

まあ宇宙人であるヤマシイの身体能力が地球人と然程変わらないとしても、仕方ない。

しかし、ターナのほうはどうだ。人間などを恐怖に陥れる存在のはずじやないのか。

なつてない、魔王としてなつてない。
これが地球を侵略する魔王なのだとしたら、一から出なおせと指導したいところだ。

手応えがなさすぎる。

昨日は不幸な事故でターナが逆立ちを中断するに至つたため、公平にヤマシイの逆立ちも一晩と言わず、途中で止めさせたのだし、睡眠時間は十分二人とも取れているはずなのに。

……それとも、寝すぎで頭がまだ寝ぼけているとか？

「昨日は存分に寝かせてあげたはずなのに、まだ足りないの一？」

それとも寝すぎたの？」

全く、宇宙人や魔王の飼育方法が書かれた本は無いものか。
私が先駆者な為、自分で試行錯誤するしか無い。

彼らと言葉で意思の疎通が図れるだけ、動物よりは楽なのだろうけれどれど。

「え……昨夜は寝かせてあげたというか、フオンが強制的に意識を刈り取つたんじゃ……あ、いいえ、僕の気のせいでしたっ！だから、その羽子板は僕に向けないでください。羽子板は羽をついためのものですよ！」

悲鳴じみた声をヤマシイが上げる。

失礼な。私がまるで乱暴したみたいに。

安らかに眠れるよう手伝つてあげただけじゃないの、ねえ？

ペシリ、と羽子板を軽く叩けば、一人が揃つて体を強ばらせた。

「ええと、その……睡眠時間の多少の問題ではないと思います。視線を微妙にそらしながら、ヤマシイ。

「じゃあ、どうして」

「た、単に僕達が不甲斐ないだけです。ですよね、ターナ」

「ああ、修行不足つてやつだな多分きっとおそらく……」

何故かターナが棒読みで言った。

「フオンさんを満足させられなくて、僕達としても不本意なのが……羽つきはもう十分堪能しましたし、そろそろ、他の遊びをしませんか？」

「その有様で？」

「あ、いえ。体を余り使わないものをお願いします。それと、少し休憩時間をください」

「注文が多いわね」

「お願いします」

「いいけど……」

私も少し疲れだし。

よいしょ、と床に転がるターナを椅子にして座つた。

ぐえ、とうめき声が上がつた気がするが、これは単なるBGMである。

気にしてはいけない。

「30分後に、1回しでもじみつか
歌留多せよつとかつたる。」

「コマ、ですか」

何故かターナ（返事が無い、只の屍のようだ）を羨ましそうに見
ながら、ヤマシイが言った。

「そり。遊び方わかる？」

「回すんですね？」

「やつやつ。えーとね……コマに組をべるぐるときつかるでしょ。

それを、」

どうやって説明しようか、と悩んだと11回1度このものが思って

浮かんだ。

「お代官様が町娘をアーレーハー回すと11回すとある。
あの要領で紐を引くの」

「ああ、わかりました！」

思い当たつたらしく顔を輝かせるヤマシイを見ながら、私は「ん
？」と首をかしげた。

あれ、ひょっとして私……彼らに毒されてきてるかもしれない、
とか？

いやいや、まさか！

ぶんぶんと首を振つて脳裏に過ぎた考えを否定した。

「そうです、フオン！名案を思つきました」

「……はい？」

頭を振つて考えを振り落とすのに夢中になつていていた為、一瞬、反
応が遅れた。

「筆プレイはできませんでしたけど、1回しでコマの代わりにフ
オンが回るのはどうですか？キモノを着て帯を巻いて下さればです
ね。私とターナが引いて……」

私は、明らかに例え話を間違えたらしい。朱に交わってしまつては駄目だ。赤く、いや桃色になつてしまつ。反省しよう。

明日から、気を引き締めて心を入れ替えなければ。

「コマ回し、やめよう」

「え、何故ですか」

「紐をひくとか体を使うと思うの。ほら、引くときに腕を動かす必要があるじゃない。その点、紐なしバンジーは最近のトレンドだと思うの。何もしないで只落ちればいいだけだから。私は遠慮しておくけど、ヤマシイとターナにオススメ

につ、こりと微笑む私と対照的に、男一人は顔色を真っ青に染め上げた。

翌日。マンションの屋上から男一人の絶叫が響いた、という苦情は今のことの私の元には届いていないことだけは報告しておく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5906m/>

地図にない楽園

2010年10月8日14時00分発行